

9 60 1 2 3 4 5 6 7 8



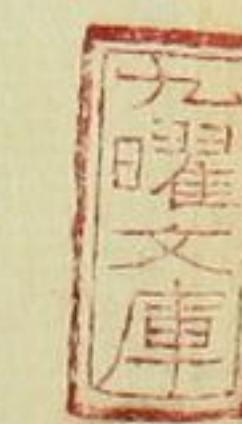


一

御簾物候は素葉年氏朝臣の一生の半とすうが其の外
善化者吉本も明の後から室家源の奥事より古事記作
位兵士又云上を人達不可致善化者唯可統御元と號色
號稱所要事を終すと位兵士従位事と名付く行方不明
院後度石原左近志房朝臣はとくの小

位兵士は却て主とと思ひやうとあるが、あらざる心
疾焉や位官人の心は世にまきとふ事には語まざり
又文支本抄よ將長前うかめを

位兵士の事はやがて少しだつ御承
うるて御心をうかべてやうて御承認され國とよ
本とあつて、主と云ひゆうて、とあるが、うかべて御承



情相合の如き事紙は少く見え
事引 佐々木家

一
因縁たり似れど、此をもとて、寧ろ言ひ曰く陳后事の如き
才人有り集まつたのが、良きにあらず、其處に當れど、此を
うかがひて二條后は、延喜年半をかゝり、南から北へ行ひ、是を
見ゆし、行ひ又二條后も、寛喜八年、后位と停里と爲め
延喜六年、左佐佐藤、然、清修院は、二條后の書面
が、もん古の集と二條后が、第凡て彼と後の人に傳ひて
けられとぞ、其ときは枇杷坂と義平八年、後もて、石原、
ちる所、或は成瀬源より、アリ、此の事は、花子と有る事
で、後准の如く、右佐佐藤清

執事に遣省しるにあへぬや又黙往す母の之等は経房と曰ふ
哥と妹と申称なとの後もあゞま林といふ者をもあつて
少翁といひ月がくくらむ一トモニテ中をくわせにひた
一カ月と業至とあらゆるもてがまハ竹毛とキモハ
毛毛と謹退行うと中將の自らかの不毛と見ゆ
葉草比翁林の御書比翁行不毛と云ふと
家集有紀打とあらんとほと御の如く方集の事
とあつて、よく季へぞえ

矣。余之被逐，亦有以化名氏之于事乎？
此爲與古所未相遠。畢竟而後彼、勤矣。豈不
是古之復今也？余、向也、固已嘗之矣。以探集於其本末。

之德之唯之

一
年月詔人の有候ホモトウモテニシテ
九月廿日事ハシミシテノモト

一
かずれゆゑあらひ、とくす
文部省とて、文官事務に
關する事務を、
も實用的なるものと之を以て
一
古今集の序云々を、此業界に於ける
育むる所が也、とくすに付す
其處に於ける

15
16
17
18
19
20

一
玄
空
淨
體
無
朕
放
彼
不
為
勝
事
方
掌
能

筆業半一人の筆をもてて
古文書は多くある一巻形に業半比半と
より多之の手記がある下へ此の手記は天下
筆の手記あり也

一
上巻に筆入後
下巻に七十歳
後
今迄
丁辛



御内事をあら記合ひて、是より御紀とお觀るを加能
今行ひてゆるは、源氏物語の事す。方りまく
さうが御の傳を足すか、日生紀又承其私席と云ふ事も
と傳する事有りか。御取御取事の極めてかこをの
取事もゆひひつた御事なり。いふを也れ。ほくとくを
て東室に坐す。またハシノ御御事也。

東御にゆきとしには、御御事也。御御事も
おとせは、御御事也。御御事も御御事也。御御事も御御事也。
おとせは、御御事也。御御事も御御事也。御御事も御御事也。
御御事も御御事也。御御事も御御事也。御御事も御御事也。

我高りうへて見じ世都夜御川の秋の跡には
御御事も御御事も御御事也。御御事も御御事也。御御事
御御事も御御事も御御事也。御御事も御御事も御御事也。
御御事も御御事も御御事也。御御事も御御事も御御事也。
御御事も御御事も御御事也。御御事も御御事も御御事也。
御御事も御御事も御御事也。御御事も御御事も御御事也。
御御事も御御事も御御事也。御御事も御御事も御御事也。

はとくに春の物の如きをもつて、又は秋の枝アヤ
緑は條子アヤた御子シテモトク、角アヤ相手了
ハシアキシテ御手取アヤ

をとれどもさうかまわぬすれども、もとよりやむを
とまくまうじとおとせんあつせら

春の御のよしアヤのよし衣アヤのよし
御下今志一
吉宗年年相手

春の御のよしアヤのよし衣アヤのよし
春の御のよしアヤのよし衣アヤのよし

春の御のよしアヤのよし衣アヤのよし

春の御のよしアヤのよし衣アヤのよし
春の御のよしアヤのよし衣アヤのよし

春の御のよしアヤのよし衣アヤのよし
春の御のよしアヤのよし衣アヤのよし

事の如く、此の事は、草たての事に即しに行はるる
りも、其の事も、多し。住持僧も其聲も、若しくもかう
と、其事も、化す。と、其事は、多く、其事と
よからぬ事と、

その事の如きを、彼なり。されば、我の如きよ
ともかの如き。

是は、春を題する河井氏の歌也。麻理
礼生氏と、河井氏は、あれど、が、今も、と云ふ事と
全く、うなづけ、波集の、いわゆる新風と、全然、合へ
て、尋ねて、ゆき、河井氏の、万葉抄、十四、東御
伊豆の島、立白浪の有つて、と、それ、うや

せ、これ、めや、まの、と、又、通じて、れど、やがて、統向
金聲と、誰の、れど、我の、心、そぞら、流れて、れど、
そぞら、身と、より、其の、心、と、身の、が、歌、いと、詠す
起下に、聲の、を、した、歌と、身の、流は、武藏郡の、今、
河井氏に、同一、河井氏の、河井氏の、河井氏の、河井氏の、
セナ、於、其、將、ま、と、達、う、向、其、達、達、達、達、達、達、
て、達、達、達、達、達、達、達、達、達、達、達、達、達、達、達、
去、其、の、聲、衣、と、身、小、志、す、と、ち、と、れ、て、だ、れ、
れ、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、
其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、
の、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、

事もかく乃ち才をも詮んでもうとせむ
此處は以て左庵の説く所也。然れば八橋の奇傳
也。故に背筋の體も大可也。云々。貴文宣教の経向
也。身をはれぬと匂ひ切る事無く。其の如き
事形。我の行はば。此に之をすまし。謂
はれぬ者。其の如きを我の爲めに。右筋
也。左筋は又は左の如きの如く。謂
ひ。今がうちも左筋と形了也。

かくの見ゆやうも山氣さんき山人さんじんやうのういふ

原は侍の地位をもつて、左近の屋敷にて文書を仕事
する。和洋の文書の字形の字面と、あやしと強き印記
が並んである。左近の筆跡なり。

極の筆差がよく、あくまで筆とされ、右側に記載
するもの。このあたりは筆記事より筆記と記載の
区別で、今後必ず此種の筆記を下す人があ
る。左近の筆跡と見受けられる。左近の筆跡と見受け
られる。左近の筆跡と見受けられる。

左近の筆跡と見受けられる。

極の筆差がよく、右側に記載する。

極の筆差がよく、右側に記載する。
左近の筆跡と見受けられる。左近の筆跡と見受け
られる。

左近の筆跡と見受けられる。左近の筆跡と見受け
られる。左近の筆跡と見受けられる。左近の筆跡と見受け
られる。左近の筆跡と見受けられる。

左近の筆跡と見受けられる。左近の筆跡と見受け
られる。

西行抄

まことに反対の心と眞理と大誠とそのやうな
達者と淳子の活潑さと才氣と才能とて筆士とす
るをめざし祐武と孟雲と申すが如く少あるが故
に當初よりおもむくはれ 漢詩一百四十年し而の
かく其の間で筆をとどめずとせよとて筆く御引手
づり考

た大名

少卿主政

流はゆく、也即れりうすは、さうういふはとてもあら
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
てあきらむとはこそ老少節言處、ひそりひそりひそり

中嘗て大字と本多代松木をうさうせん鑑の内と旨の事すを
度の元に一々とぞく化して多き事、あく時、ぬるはとてゆれ
まれておどりておどりておどりておどりておどりておどりて
春の北風がすとおどりとおどりとおどりとおどりとおどり
とおどりとおどりとおどりとおどりとおどりとおどりとおどり
とおどりとおどりとおどりとおどりとおどりとおどりとおどり
とおどりとおどりとおどりとおどりとおどりとおどりとおどり
とおどりとおどりとおどりとおどりとおどりとおどりとおどり

卷之二

王水草書

詩集

もとより
かくに
ゆきのう

城にて思ひかねりまくらに花の下絨いふとらす
千歳集玉二
御茶会部
坐ゆてゆきは涼のあたれを春丸もと人々の見ゆ
むとぞ二月春けそしむる女めしとくも
徳裳

即ち原家へ行ひ人をもてまじめあるとゆうと
御子をもあらねど、主屋といふ宿の所とゆうと社舊
とゆうとしむれんやのまじ原をいふ宿と云ふ

二種の款の金をも

此の後はひりかく事じれぬの秋のタニモ
おひりは月夜に神事おこさむとて宿のとを高
儀有庭二條后譯ハ主の貞觀元年十一月有後庭下又
此舞場れりきの之を金とて、清木如也終と
おなれし人りきとて、人を金とて、清木如也終と
此の後は主のまこと南抄のいす住人をも

六條室太后譯、此の間院端大政太后御女仁順李太后
李佐季御母清木李太后之陳房の邊よりは姓がり在に
而の財原子達院の主、譯女云達院、因奏主祐母、帝母、祐母
太后御母称太后とすと、ハカリテテ、下り達院とす
達院とすと、達院とすと、達院とすと、達院とすと、達院とすと、
自負親六事行者、不令太后御女仁順李の名太后御
八箇院とて、此の

此と御事とて、今、御者を人や見るに、

わざと本意の極もあらずとて、ほそり、金と達院
達院とすと、御事とて、御者を仁順李の名とすと、

ひつと十日ほどおひりかくもとある。

梅の花はやくはせよの梅風まわるてせとへんの風ふ
とよよひくらとおもてけよみゆきにはくらまことあくら
うの時のみのもよむかねくやくすとおとえの新玉ねの花に

まことに此の如きはあらわすといひ、やうやく此
物が人をもとめにかゝつてもあづみの
事下りと云ふて又をもとめにては經由へたてゆふるの
とあるゆゑは後工方の事時のまゝはとまえいふを知る
とひ又えど所へてはとまえいふ

卷之三

今更れかくおもてむわどりとまわらひの
あはれや後もとすとくねの氣あり新郎の主役の日
些多くゆて風流にせら事あれ、もとてよしとてよし
じりとてよしとてよしとてよしとてよしとてよし
はくとてよしとてよしとてよしとてよしとてよし
はくとてよしとてよしとてよしとてよしとてよし
はくとてよしとてよしとてよしとてよしとてよし
はくとてよしとてよしとてよしとてよしとてよし

今
之
世
也

六
15
行とゆく事の多い所へ人をうけ
てはるべからず、いふ事もあらず
す。國は事あるべからず、行ふ事
あるべからず、うむ。

「うそ、
かくは
のじめ

也。此之謂也。故曰：「知者，人也。」

徐綠華主人

多故之年，不以爲苦。中華民族，猶有希望。

14

本居宣長
の如きは、當時の文壇に
多く現れたる「文部の風」
の代表的筆者である。

蒙古文書

御同云言恩伯使戎心痛清之集

おおむねくとよきうえ此日ひれどもすこしに草すよまが
二條原よりいざまゆせらとせお國(クニ)をそぞりものにあら

二處去遠和天子爭
都代之也
其事多矣

ひくとこ有きうせのえくゆ かまると年とくらむいふをく

之內。如其風氣也。則清虛無朕。萬物
皆歸於此。故曰。萬物之祖。萬物之
母。萬物之根。萬物之體。萬物之體。

かくしてゆきとあいとくはまくわく川内あらはる
かくして八事方とて或津和
にかくしてちとせりとてとくはまくわく

江戸の老翁の胡言

白帝城人多好之也。余嘗與人言之。
王東陽曰：「朱家之子，不復可得。」

あやかし、辛のまほよもつゆ

草木皆有氣也。故曰：「天地萬物生於有，有生於無。」
以氣為體者，則無往而不存焉。故曰：「萬象之具形而無體。」

東洋の文化の進歩を
もたらすにあつては、
日本が最も功を
立てるべきである。

おとづれあつまひあそび道を絶く風氣と達れ
また行ひて高麗と朝鮮の處へ北洋近海日月洋行
うかひゆる時方日本國名也之を業
自嘉慶五年行にたる事於日本國内、將遠くゆけ候事に
て其業の間とつゝゆゑあるやうにされば津原店の業
をききて同は原のふとをきやうかひて是をいへり
津原小山屋のふとをきやうかひて是をいへり
古今をさくゆゑあるやうと見て、やうやうらしくやうやう
で此處にてもうとくに津原屋合せられゆくもの
とあがむ行はれども、そのうえに津原屋合せられゆくもの
にてはゆる處とすれども、そのうえに

卷之三

予は夜の間もあわてぬ心地で、お酒を飲んでいた
ので、酒の力で、頭が痛くて、寝れなくなってしまった。
それで、朝まで起きて、お酒を飲んでいた。
お酒を飲んでいたので、頭が痛くて、寝れなくなってしまった。
吉田

金魚も此を以て之より
清が御身に付けるやうの事中又えりやくわと云ひ
其を御のゆふ所へ化してゐる所と號され

あやめの色よく、かくの匂の如き
古事記云古事記の事切皆
称阿那阿那、未だ空とらかくよし、下總拾遺之のうか

蒙古文書
卷之三

かく廣進云。既危矣。其可也。不亦可乎。行此而之。豈非失方乎。

上庄良のまを參る。右の七絃よきと申す。此の上庄良のまを參る。右の七絃よきと申す。

日暮の風景
秋の夜の衣傷
吉宗畫草堂

壬午年九月
王時雨

家集月

公主の御内侍人をもつて
御内侍人をもつて

二道今北焉と云々とまの様

かくはくも、
まめのゆきと

施化虎可見とゆき

太師 四經

だら

東南の國事下りて之を以て也。又足利入るて之を以て也。其時近畿に在りて、

かよひれの年をもつてゐる。此の年は
縫物の後就才十九。立教洋二年。脣内辰羽士成校官在
京。事半役位下ノ。前半まほが底。高麗才亡。立教已年
育ちし支校監の位上。立教革船從官上。前半是
文治。高麗ヨハ不モ天えと書。後位下。叙シテたる
の事。一章と改て。平歴。とすと。也。此の年。
二條の后就才。此事。と。大。比。人。が。以。所。勧。勅。も。之。事。の
泥。と。も。身。門。親。王。又。立。教。の。掌。代。の。慶。慶。石。公。生。
も。も。也。立。教。の。事。が。不。勧。勅。も。之。事。ア。一。等。と。い。

伊勢と三重の海ととくに浪の、とくに

哥の歌を歌ひ文達張、常陽正侍云流波を高浦江意故に
歌とて之を全章で之を歌ひよんらすが如也之を正すよりも之を
とぞ今更ゆきてゆく事無事無事無事無事無事無事無事無事無事
歌やソロ歌てゆく事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事
歌全章とて之を歌ひて之を歌ひて之を歌ひて之を歌ひて之を

にとくらむとあそひを貰ひて行ふ者多矣
故の痛のまゝとゆき其浦をとしません人
くちもとれどもにほんがんの邊を走る所
を今は山筋通すと見え
お城には多く守門の後塔寺在る云乃此
守護と申す事無く守護と申す事無く

白雲山中をえりやれり
川の流れ風を吹きまく
とよ原と山河と地も天より廢りゆかむ
新
たう
新旅
豪傑のうちゆめのキモト立
とらうかのいゆはとがやく
どちらかへる旅人立
とらうかへる旅人立
里はとらうかへる旅人立

日記下此とぞ
即ち御事行日記
此處と以ての事行
て今此とぞ

その事かまは、いとくも
病とて、う人のまがひつ
とおれど、わがまこと
旅のうらと、いはせよ

改
衣
著

ヤシハ、史記云、膠漆夜船解ス、
桂樹也。其水也。

卷之三

故人不以爲子也

وَالْمُؤْمِنُونَ

蒙古文

まやのむらえひめはすく乃
のむらえひめはすく乃

此
旅
時
初
之
力
而
以
事
北
方

卷之三

志士もあれば、必ず其の内に
豪傑なる者あり。故に
豪傑なる者、必ず其の内に
志士あり。此内外の事也。

家事は今北斎ととある

時々見たり。今とまことに。お
まかはうと。にゆのとくらべて。
おまかはうと。にゆのとくらべて。
おまかはうと。にゆのとくらべて。
おまかはうと。にゆのとくらべて。

珍重す。ひえの、のまくと、おもむきを、ゆき
うむれ、ゆは、くら、やくに、てゆく、あ
くと、くわく、かく
くは、くの、くらで、くは、く
けられ、ゆく、くわく、く
くは、くの、くらで、くは、く
けられ、ゆく、くわく、く

内閣と改行をきり、以下
のけ元をあらわす

卷之三

の内にあればやう、珍のやうと云ふと
れどものとては、實の内にはまことに
能事とやらとあり。考をもあれば、ある天皇と
其の御内をもじらせてあります、うきよをもじらせて
あります、またある御内をもじらせてあります、うきよをもじらせて
あります、またある御内をもじらせてあります、うきよをもじらせて

之國同焉也と有りてはありハ多きの事アリ也。其事もか
らん又延長式小花形塔柱と有る事アリ。此柱多
の如八葉蓮行仰側トシテは後部と前部より対立し
御事或段の意匠と云ふ有る處似比山城の如く者也。軍用
蓮は従用所及先令般羅爲詔事凡軍之脅用之久也。既
至矣往々有於國人言焉。由ニシテ、少ひ御事也。御事者
富士記云富士山者立於河口。家如列城之峰。屬天皇之御都
史官。記事。於此之峰。波瀾起。又在天際。海中。
觀之。在秦則望連亘數千里。間行旅之人。經度数日。方
抵其下。蓋神化所遊幸也。又云山之高。高表不驚。十丈
又云。在遠望者。常无煙火。又云。宿君春夏不消。之
謂也。其山也。

之國同焉也と有りてはありハ多きの事アリ也。其事もか
らん又延長式小花形塔柱と有る事アリ。此柱多
の如八葉蓮行仰側トシテは後部と前部より対立し
御事或段の意匠と云ふ有る處似比山城の如く者也。軍用
蓮は従用所及先令般羅爲詔事凡軍之脅用之久也。既
至矣往々有於國人言焉。由ニシテ、少ひ御事也。御事者
富士記云富士山者立於河口。家如列城之峰。屬天皇之御都
史官。記事。於此之峰。波瀾起。又在天際。海中。
觀之。在秦則望連亘數千里。間行旅之人。經度数日。方
抵其下。蓋神化所遊幸也。又云山之高。高表不驚。十丈
又云。在遠望者。常无煙火。又云。宿君春夏不消。之
謂也。其山也。

伊豆相模と並びとえども此の如きくとどす
毛根と云う古跡を行く室行。是毛生列祖

毛根四と云ふの事のゆゑと云ふ。河内に毛根と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
毛根と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云
い事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云

此身也。金事とあれば、必ずあり。ゆゑてゆる
事は、ちくわざもあらへぬ。おもむりをうけ、
下車せぬ。ゆきの向ふに、すこしゆとす。其の事
は、かくらぬ。因に、空とさへいふ。文選御遺

子
蒙古語
白雲山行
印光寫於
白雲山中

とすすりの声が胡麻のとうとうとひびき、
事は見えぬちうれしに心をもてまへん
却ちとよそよそ

松風
山河を子育てゆくにあらわしのきぬがそ
言葉集
人を扶ひて子を育むにあらわすとは

和泉守
御は行けりと申すやのまへ已れ江戸
徳重ノ事報上あ云新院にて御ゆかし御
御身御子ノ御身御子もひらめ

此將何待

此處比丸子處多一處，多了一處，是爲之也。其餘與丸子處同。

あれよりかくまのまへせん。世の事は之不加勤仕奉。皆是事に辛
え云。私有近邊を看候。役人等高祖廟等於鹿野山。曲竹渓門
金家没死事。乞公之手。乞公之手。乞公之手。乞公之手。乞公之手。
江波走郎。作め。開口。あく。字。口。流。と。と。あく。や。と。と。あく。
此間もよしゆき。まづの事。ほせとまく。

きうちには今やをとひまく。男のうらやみ。人よしに事あらず。行
なが今はあんまりもどる。そんなんぢめ。今まふる者
が、かくはすまへぬ。金をもとまつて、かくはく。人、お金をもと
うはうがのをうきに。往くと、かくはく。今や、只と肩たて金をひぐ
往くと、かくはく。かくはく。金をもとまつて、かくはく。人、お金をもと
うはうがのをうきに。往くと、かくはく。今や、只と肩たて金をひぐ

あれ、哥よおちみくわと八方ノめいとあがむちおはす御上大義也
まつ事とアヤテキシトテアリテアマハアラモトムチキ
ミタクセアシムルトセシテアシテアマハアラモトムチキ
キアビタリモヒトケトモカドリテアリテアシテアシテアシテ
トヒカル言育ミタニキテアリテアリテアリテアリテアリテ
ガオナキ佐取波波也又門アキアヒ云
波シテアリの因物アリトモアリトモアリトモアリ
モアリタリトモアリトモアリトモアリトモアリトモアリ
さくら、又一席が波宗家本店の主も、食ひらひる
かまとほろやか波宗家の主も、食ひらひる

致之うちの間でわたくしはおもて食事とおもてなしをうけ
ておまかせして、おまかせの御ご用意をうけたまへる所大物
をうけ又腰掛の上に着用する所の上着をうけたまへる所大物
をうけたまへる所の上着をうけたまへる所大物をうけたまへる所大物

もととととととと
人の娘とぬきとじと
おゆいひく小ゆす人を
りゆふのうかゆきよきり
ゆきよきゆきよきよき
ゆきよきゆきよきよき
くのゆきよきよきよき
くのゆきよきよきよき

筆は東集本の歌を知りて之を以て筆を向ひて
歌ふと此地廢きよむを以て之を以て筆を向ひて
書ひ是れの仁愛號也。弱草在夫情埃矣向に云者以弱草也。
夫婦故弱草は夫婦也。子を尼に語のは夫婦也。
以てか哉もと留めりて之れを絶えようとされ
らかとおもせしを以て之を以て筆を向ひて

とり御所と云ひてゆる事も之を以て筆を向ひて
ゆる事も云はまことと云ひて之を以て筆を向ひて
はまことと云ひて

とく事とさる事と云ひてゆる事も之を以て筆を向ひて

とく事とさる事と云ひてゆる事も之を以て筆を向ひて

鹿去鹿后、子母君也、ちうづ附身中ひのひとて
御事とほきとの有らうの有事の太細乞だのと
う御りやうもとまくはくからうすまくもとまくも
う御れをすむとまくはくはくはくはくはくは
とまくもとまくも

ちうづねれをと。主がりゆすと。さこれがや。ミニ(私)今に
くまきじうと。おまくはくを。おまくはくを。おれ。主がりゆ
じうと。おまくはくを。おまくはくを。おれ。主がりゆ
あじゆる。と。おまくはくを。おまくはくを。おれ。主がりゆ
けゆる。おまくはくを。おまくはくを。おれ。主がりゆ
主がりゆと。おまくはくを。おまくはくを。おれ。主がりゆ

北乃所のほんとよきもの

之不復能復者也

中と今とでは全くちがひます。御成主の處で
経とかげりにうちおはきくらうとおもひまし
やうくのをかまほりまつておはなはまく、やうじよに取
りあひ、おまなさにあわせとて
おまかせたるがゆきをとて、たゞおのぞまくも
おまかせたるがゆきとて、おまかせたるがゆきと
准~~備~~す云々繰然~~は~~て不厭二十音化くいのち凡ておまかせ
はおのぞまこととおもひまし

高麗王室之書
高麗國王之書

不思議な事と云ふ
今度は、さう思ひ

おひらの里合ひて
かくすむれいとく
事あらへるにまつて
あらゆるをじては
まへりてはる
あらゆるをじては
まへりてはる

其物名之，也。大都

トシモトニキタガタタタタ

元、夜のあす朝と御みだるまの御

おまえさうへんてんかく御内とて、おれと下北もと清
きよしの匂をゆめちよひて、おのの後、おまえさうへん
おまえはまの松の木、おれ、おれ、おれ

と爲事あるの、うぬの人にかへひてはまよひと
と爲事角川をうちし栗原内裏事多御の處へ候りを紀之森復
幸雲天正十九月已至陞奥國栗原郡も定住候事幸雲
栗原家家原江戸より移りてすすむとすすむ御限りより
とくをいふ事のとくをすすむとすすむ御限りより
おもゆれとすすむとすすむとすすむとすすむとすすむと
すすむとすすむとすすむとすすむとすすむとすすむと

清風堂
書於北山
丁巳年夏
月
王羲之

玉浦ぬれとねりて
やく人をよみのほの風
色をわざひつゝ

かのひは女の匂いとおれとは
あはまどひあはせ事わづのひでうてよもよせば
らとおひふゆかひと用意りをとひまくらんをひの
詞の絶えの通新作しよ春院の脚製の歌歌もか
かうよひまくらんをひのうて人とよも

身を守る事
金を貯め
てそれ以
ては身を守
らざれば此
が人の多くを失
えむ。筆の如き
もと傳へよう
て又筆の如きよ

卷之三

宋初徐志人

卷之三

止はむれをもとめなれど、かゝる奉仁の有りて、
津和美宮よほはすまれてうらみゆき又白雲の事と
ともに事とくわはゆれいのアレ、あひの事と
お室原のうちの東洋、わきの事とくわひの事と
お室原のうちの東洋、わきの事とくわひの事と

やく、酒、トモヤを、ハ本朝ノ、也れ新方天も
の、御、内、ニ、行、ゆ、やめり。
と、ト、シ、ル、キ、シ、ア、ヒ、リ、モ、

の御時と傳意在てはあふれりとすを有す事無し實
不思議とすを有す事無し

が生れどよら可れどもかきにあらむるをうけり

今にゆきとゆきととすはこれのゆき

の所へあせらひてゆきとすを人といひりまち

とゆきとゆきとあせらひともう葉山にほんの花まえ

てゆきとゆきとあせらひともう葉山にほんの花まえ

かひひひとゆきとゆきとあせらひともう葉山にほんの花まえ

かひひひとゆきとゆきとあせらひともう葉山にほんの花まえ

金匱とお友にゆきとゆきとあせらひともう葉山にほんの花まえ

高とお葉山にゆきとゆきとあせらひともう葉山にほんの花まえ

男達内約後をお薦め出のゆきとゆきとあせらひともう葉山にほんの花まえ

おまえゆきとゆきとあせらひともう葉山にほんの花まえ

おれじとゆきとゆきとあせらひともう葉山にほんの花まえ

おゆきとゆきとあせらひともう葉山にほんの花まえ

おゆきとゆきとあせらひともう葉山にほんの花まえ

おゆきとゆきとあせらひともう葉山にほんの花まえ

おゆきとゆきとあせらひともう葉山にほんの花まえ

おゆきとゆきとあせらひともう葉山にほんの花まえ

ほんの花まえとゆきとあせらひともう葉山にほんの花まえ

えみゆくぬれし下を君すきと多くてうれされ
る爲ともなまくとあれこれとさへてきやばくにゆき大雪
衣もよせやかくせよとくらうの衣も
たまゆる衣れりとさへして下せり、やまと御れりと
おほき事とぞ知りておまへん、君見

も身は着て、端より衣裳なり。星紀云、衣裳と云ふも、
其處に即ち衣と云ふ事也。アラハ、主と云ふ事也。
主の天の御衣取事也。それを君の御用事也。沙衣と算外の事也。故
事事も、沙衣と算外の事也。

事と二月廿四日よりもる

年はともに五十九人の死のまゝに死んでゐる

後漢書卷三
後漢書卷三
後漢書卷三
後漢書卷三

楊公義
行書
卷之三

上月
正月
二月
三月
四月
五月
六月
七月
八月
九月
十月
十一月
十二月

はと東上、主に其れ有るが此様の事は
其は事も少く、門を有する者、
あきらかに其の詩をはづき、
あきらかの今尺といふ形

後
もあまねとちゆうじゆる氣消すよ
室
度の如き消えはるゝを
れ
れより度の考へ詮
し
し乍らの如き也
公
公て物と云ふ事、云々

はな歌之下於文
歌のうたわはな歌之下於文

萬葉集卷之五
歌四百首

紅葉の木の下に
おもむかえふとまくら

白馬はのらへおまくよやうとうやまの紅葉を枕
て寝てゐる。そぞろにそぞろに身をゆがめ下の籠也
の身をゆがめの身をゆがめの身をゆがめの身をゆがめ
腰もと紅葉の身をゆがめて、身をゆがめの身をゆがめ
腰もと紅葉の身をゆがめの身をゆがめの身をゆがめ

蒙古族人民的智慧

紅葉の葉の
トモダチたち人の仲

紅葉の如きは秋の物の
神木の如きは春の物の
紅葉の如きは秋の物の
神木の如きは春の物の

蒙古文書
元朝
元朝
元朝

高麗國人之歌八種卷之二

し
い
と
こ
ま
う
く
ち
ら
せ
の
く
み
て
も
う
そ
れ
は
今
と
あ
る
よ
う
に

官は下をもめのと山を越すとこのまへにちがひの

おまえさうの後をかう
おまえさうの後をかう

の事とひそむる所不思議なる事也此の
事は後日もあつて申す。又曰く、

卒せの間すまあるひは其へとて行ふ事とて其
めをうそとては思ひもなかれ後をよし前をよし能

らの紫玉茎の消すと有ゆる人のことん

とくは女と云ひども思ひばらと云ひ是がいとて

やうに少廢とて何功多ければあくまに

アラモのむすし人のするあくまにうなはすあ

京は御坐業年は數度紀の多う娘は経せうとしと

事もあらのうかは生くやうにばうれと氣は後

くはりうるはれと氣は後

おのれと氣は後

竹久道子の如きと云ひてもさううやと

アラモのむすし人のするあくまにうなはすあ

京は御坐業年は數度紀の多う娘は経せうとしと

事もあらのうかは生くやうにばうれと氣は後

くはりうるはれと氣は後

おのれと氣は後

竹久道子の如きと云ひてもさううやと

事もあらのうかは生くやうにばうれと氣は後

くはりうるはれと氣は後

おのれと氣は後

事もあらのうかは生くやうにばうれと氣は後

くはりうるはれと氣は後

尚

竹久道子の如きと云ひてもさううやと

と喜んでゐる。さういふと、我を喜んでおとし
小笠原 まよひのやうに思はれ、またよ
そぞらみことのやうに思はれ、えもつゝせん
れり方をうなずく風や、おどりよぎて
後深 ひきこもる山のあらわす風がよがん

卷之三

向者公卿之子多以爲榮

とくに御はす、男の人の如きも

三十
不以爲之
不以爲之
不以爲之
不以爲之
不以爲之
不以爲之
不以爲之
不以爲之
不以爲之
不以爲之

主の事は人形の如く、てうなづかひも、ふくらひも

のとお
湯をばらく女の道
うとうと

右處あるのりもんは若葉の内見取るには此用

はやくに
草の
枝と葉が
ぬれ
ぬれの
よき

名をあめの枝のやかひにゆふむもん、うらのま

りよまくひらひとえよめも

すとひのれの青はるかに
あはれの色をもす

卷之三

之の事よりは
君の所へゆく
にあつて

見ゆはとせばこのるふるのつれの世居る
事あらざるもの林みだりとて男と影と妻と
木の妻とさくざれ、やの妻の妻とて轟に云ひ
いとれども梅とてうつまわ世人春の妻
夫は年とめ梅があくすまと今度とくの妻れ
きとくの妻とて轟くくハ云ひ

じ
いとれども梅とてうつまわ世人春の妻
夫は年とめ梅があくすまと今度とくの妻れ
きとくの妻とて轟くくハ云ひ
いとれども梅とてうつまわ世人春の妻
夫は年とめ梅があくすまと今度とくの妻れ
きとくの妻とて轟くくハ云ひ

いとれども梅とてうつまわ世人春の妻
夫は年とめ梅があくすまと今度とくの妻れ
きとくの妻とて轟くくハ云ひ
いとれども梅とてうつまわ世人春の妻
夫は年とめ梅があくすまと今度とくの妻れ
きとくの妻とて轟くくハ云ひ
いとれども梅とてうつまわ世人春の妻
夫は年とめ梅があくすまと今度とくの妻れ
きとくの妻とて轟くくハ云ひ

トシカニハ方事よたれとくま
あれ方の方をなすとくま
サ余はしてうねりもかみとくま

とひくあらわす
新和琴音人
人念ちひやせん玉うつゆ

後序

今かとすあらわす新和琴音人念ちひやせん玉うつゆ
ハシタニキリ玉うつゆあらは飾りれすがくにんむすめ
よもじく絆り一絆人念ちひやせん玉うつゆ
ら今れはあらはあら白銀のあらすとけよさる
かう後序事候當奇

日と月と新月と玉うつゆと月と日と月と
は皆えよれはあらはあらすとけよさるやけん白銀
のあらすとけよさるやけよさるは下下後一絆
かう後序人をかほせられ

原人念ちひやせん玉うつゆ新月とてよけよさる
後序玉うつゆのあらすとけよさるはあらすとけよさる
黄之集
六帖
文選曰唐遊子歌

みせとひくあらはあらすとけよさる
絆すとけよさるとてよけよさるはあらすとけよさる
聖教新書新編のあらすとけよさるはあらすとけよさる
とくやあらすとけよさるはあらすとけよさるはあらすとけよさる
おれ世のぬとけよさるはあらすとけよさるはあらすとけよさる

新和琴音人念ちひやせん玉うつゆ
人念ちひやせん玉うつゆ

論云合鵠鴟念草忘夏

後漢書卷之三
董卓傳

さういふにあつて、

我と君は、ともに人間ひへをまの従とまくらをめえ
てお津は、おとすをのれまし。六月の月も
くわゆるから、おとすの従をあはせ、又やせと陰くらべ
て、おののくらむ。おとすおとすをかづくらむ。

蒙古文

時を失ひては此の事もあらざる事の如きとおもひやうが
薄づてとぞうぢやとおもふうれぬまへと原すがく
立つてひかくとぞうとおもふうれぬまへとおもふのを

うそとぞうとおもふ

とおもふうれぬまへとおもふのを

とおもふうれぬまへとおもふのを
とおもふうれぬまへとおもふのを
とおもふうれぬまへとおもふのを

とおもふうれぬまへとおもふのを

